

ゆくのき通信 第6号 2009年11月



目次

木原先生と植物園とメタセコイア	齋藤清明	2
京大植物園の森	佐野修治	5
「知的資産」商品化あれやこれ	今山稲子	7
植物園への意見を掲載してゆきます		10
植物園を考える	村松 繁	10
植物にちなんだ日本の色の和名	有元高太	12
編集後記		16

表紙画 寺田 晶英

シンボルイラスト かじわられいこ

木原先生と植物園とメタセコイア

齋藤 清明

総合地球環境学研究所・教授

植物園とは、もう45年余り前、私が農学部
の学生だったところからの付き合いです。1
964年入学で、下宿先は北白川西町16。
植物園のすぐ東側に接していて、部屋は2階
なので、窓からよく眺めたもの（よく茂って
いて、あまり展望はよくなかったが）。それ
に、所属した農林生物学科（いまは再編され
てなくなったが、4つの講座のこぢんまりし
た、いい学科だった）の研究室は、農学部の
建物の南端に位置していた（ちなみに、同窓
会名は南窓会）。植物園の木製の門は目の前
にあつて、農学部のなかでも、いちばん近か
った。学部3回生の生態学実習では、植物園
をよく使わせてもらった。受講者は農林生物
学科の数人だけだったが、教養部の柳島静江
先生と原田英司先生からは丁寧に指導して
いただいた。池のプランクトンの調査では、
季節変動などを追跡したのだが、ほとりに立
つメタセコイアの立派な樹形が印象的だっ
た。その縁もあつて、のちに、拙著『メタセ
コイア 昭和天皇の愛した木』に取りかかる
ことになる。

ところで、この夏（2009年）、村上陽一郎
編『日本の科学者101』（新書館）に、木
原均、今西錦司、伊谷純一郎の3先生につい
て、執筆を依頼された。いずれも、京都大学
の生物系の教授なので、「ゆくのき通信」の

読者の方なら、それぞれよくご存じであろう。
植物園とも何らかのかたちで縁がある先生
方だと思うのだが、今回執筆した小伝では触
れる余裕がなかった。ことに木原先生は、植
物園の創設に当たった理学部植物学科の初
代教授・郡場寛先生の助手を務め、その後は
農学部の創設に関わり、長く教授をされたか
ら、植物園とは関係があるはずである。とは
いっても、わたしが知っているのは、メタセ
コイアに関してぐらいである。そのことに触
れてみよう。



木原均博士

『一粒舎主人寫真譜』木原生物学研究所，1985)

木原（1893－1986）は、小麦の起
源を明らかにした遺伝学者として著名であ
る。北海道帝国大学農学科卒業。京都帝国大
学理学部助手を経て、1924年に新設の京
都帝大農学部の助教授。27年、同教授。5
5～69年、国立遺伝学研究所所長。文化勲
章や日本学術会議第一期会員、日本学士院会
員、日本遺伝学会長、国際遺伝学会長、冬季
オリンピック日本選手団長を務めた。種なし
スイカの開発でも知られる。

経歴をもう少しみてみよう。東京に生まれ、麻布中学の生徒のころに南米に渡って大農場を経営してみたいと夢見たという。札幌農学校の伝統を受け継ぐ東北帝国大学予科に二年浪人して入学。札幌の恵迪寮で過ごし、作家の有島武郎が英語の教授だった。学部では植物生理学の郡場寛の指導を受け、卒業論文は「花粉に及ぼす低温の影響」。「青年よ大志を抱け」で知られる札幌農学校教頭クラークは植物生理学者であり、その直弟子の宮部金吾(同期生に新渡戸稲造、内村鑑三がいた)が木原の大学院での指導教官だった。先輩である坂村徹は1918年にコムギ属の正しい染色体数の決定と倍数性を発見していたが、留学することになり(京大に移った郡場の後任教授になるため)、木原がその材料を受け継いだ。これが、晩年に「自分は一コムギ研究者」だと語る、生涯の研究テーマとなる。

郡場の助手として、20年に京都帝国大学理学部へ。24年4月に農学部に移り、9月から約三年間、文部省の在外研究員として欧米留学。ベルリンでコレンス(メンデル法則の再発見者の一人)のもとで研究した。帰国後、わが国初の遺伝学を名乗る「実験遺伝学」講座を起す。戦後の55年、京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検の隊長(カラコラム支隊長は今西錦司)として中央アジアに赴き、そこで得たタルホコムギと二粒系小麦の交雑からパンコムギを合成し、小麦のルーツについての自説を確認する。また、38年に内蒙古生物調査、59年にアッサム・シ

ッキム稲採集調査、64年にコーカサス植物調査など、フィールド調査にも力を入れ、京大旅行部(山岳部の前身)部長や京大士山岳会(AACK)会長を務めるなど、「探検大学」といわれた、京大の顔でもあった。

さて、理学部付属植物園は1923年4月に開設されている。理学部植物学教室創設当時の郡場寛教授の構想のもとで建設がすすめられ、その郡場の助手となるために木原が京大にやって来たのである。



京大植物園を散策する郡場寛教授と弟子たち(1949.4.25. 木原均編, 1970.『生物学閑話第IV集』廣川書店)

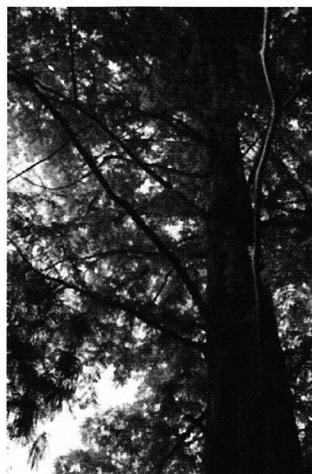
京都帝国大学に理学部が設けられたのは1919年で、植物学科が生物学科から独立したのは1921年のこと。二つの講座が設けられ、発足時の教授は第一講座(植物生理学と生態学)担当の郡場のみだった。郡場は、植物園をたんに珍しい植物を集めた栽培園ではなく生態学的特色をもったものにしようと思ったという。もっとも、木原は24年には農学部に移っており、植物園は助手の三

木茂や技能員の井上清三郎らが中心になって整備されていった。

三木は、盛岡高等農林を卒業、石川県農林学校に勤めた後、1922年に植物学科に選科生として入学。郡場の教えを受けた、植物学教室の草創期の学生でもあった。水生植物をテーマにし、巨椋池や深泥池などで調査。さらに、植物遺体に関心を持ち、各地で発掘していく。そして、三木を有名にしたのは、メタセコイアであった。三木は日本で出土する化石（植物遺体と、三木はいう）をもとに1941年にメタセコイアを記載していた。既に絶滅している化石の種として。ところが、戦後間もない48年、中国の研究者がその現生種を新種記載。生きていた化石として脚光を浴びる。すぐに米国の研究者が中国・四川省の現地に飛び、やがて米国で育った苗木が日本に届けられる。これを受け入れるために、メタセコイア保存会が49年12月にでき、その会長に木原になった。

50年2月28日、カリフォルニア大学からメタセコイアの苗木100本が羽田に到着。3月2日に東大で開封され、保存会では東京と京都で半分ずつ分担し、各地の大学などに植えることにした。京大理学部付属植物園にもその苗木2本が植えられた。その後まもなく、ノーベル賞を記念して基礎物理学研究所（湯川記念館）が建ち、移植される。現在、植物園にある二本のメタセコイアの大木は、その挿し木から生じたもので（うち一本は確実に。もう一本は移植された木そのものかもしれない）、大きく伸びた姿は、じつに

風格がある。日本列島に約100万年ぶりに蘇った、その最初期のメタセコイアなのだから。



植物園の池のほとりに立つメタセコイア。

じつは、三木の記載から70年が経つ来年（2010年）の8月3-5日、大阪市立自然史博物館で、第3回国際メタセコイア・シンポジウムが開かれることになっている。

ついでながら、京大のフィールド派の元祖ともいえる今西錦司先生（1902-92）は農学部の第一期生であり、農林生物学科応用昆虫学講座だった。その学科の実験遺伝学の教授は木原さんなので（じつは、私も木原スクールに連なることになるのだが）、今西さんと植物園の関係にも興味があるが、またの機会にしたい。

参考文献：

斎藤清明(1995) 「メタセコイア—昭和天皇の愛した木」中央公論新社。

京大植物園の森

佐野 修治

日本菌学会、関西菌類談話会会員
京都御苑きのこ会世話役

「大文字山」に登ったこと、ありますか？松尾芭蕉の弟子、服部嵐雪が『布団着て寝たる姿や東山(枕屏風)』と詠んだ、東山の一角にある如意ヶ嶽(通称右大文字)です。「大」の字の交差点に立つと京都の市街地が一目瞭然、180度のパノラマが眼前に広がって見えます。



写真：大文字山から京大植物園を見下ろす

正面彼方には愛宕山を筆頭に西山の峰々が連なり、左手には見晴らしが良ければ大阪梅田の高層ビル街までが見えます。右手には北山連峰の奥深い森から濃い緑が流れ込み、鞍馬のお山から上賀茂神社の上賀茂の森へと続き、京都府立植物園の半木の森から、下鴨神社の糺の森へと引き継がれます。その一連の緑の流れは、京都市街の基盤の目のほぼ中央に位置する長方形の緑のエリア、国立公園「京都御苑」に行き着いています。その御

所の森から大文字山に連なる緑のラインを一直線に裾野まで辿ると、京都大学に隣接するこんもりとした吉田山の森に行き着き、その緑は右手に隣接する京大植物園の森と連なっていることが一目瞭然です。

私はいつも、大文字山の「大」の天辺まで登り、そして一度天を仰ぎ・・・、さぁ〜と大空に飛び立ちます！大鷹になったつもりで・・・。まずは東山の緑深い峰々に平行してゆったりと翼をはためかせ、北山の奥地をぐるっと一回り。新鮮な空気を胸いっぱい堪能した後に、深山から流れ出て点々と繋がるそれらの「緑の森」を気持ちの良い風に乗って「天」から辿るのです。高野川と加茂川の二つの流れが出町柳で合流し、太いひとつの鴨川の流れとなつて下っています。天空からいろいろな角度で見下ろす京都の町は、また格別に美しく、春は桜のピンクライン、梅雨から夏は山々が盛り上がるエネルギーいっぱいのグリーンライン、秋は言葉では伝えきれない紅葉のグラデーションライン、晩秋から冬はひっそりと沈黙する山々が静寂の古都を演出し、時として出現する一面薄化粧の雪景色は、点在する緑の森をこんもりと白い丘に変貌させなだらかなホワイトラインが出現します。

生きとし生けるものすべてにとって、この縦横に点在する一連の「グリーンライン」が、如何に貴重な緑地帯なのかが、空の上から眺めると即座に理解出来る事でしょう。

鳥たちは自由に大空を飛び回り、植物たちの種子は多彩な風に乗る、菌類たちの胞子

も子孫繁栄のチャンスを探っている事でしょう。ありとあらゆる手段で辿り着いた、市街に点在するそれらの小さなオアシスは、森の生き物達の都会での貴重な生活の場となっているのだと思っています。京大植物園はそんな大切な役目をも果たしている貴重な場だと言えるでしょう。大阪の八百八橋に対して、京都は八百八寺と称され、市内外の各地に「鎮守の森」と呼ばれる、変化の少ない貴重な一角が保存されて来ました。その土地の多くは地球の肌とも言える、自然のままの「土」が残されています。其処を歩いていると、地球が呼吸しているような「気」を感じるのは私だけでしょうか？最近は何事もあり必要に迫られてか、古くから在るお寺や神社の境内も、徐々にアスファルトやコンクリートで舗装され始め、地球に蓋をしたようで少し息苦しく感じています。そんな世の中の変化を忘れさせてくれる「京大植物園の森」が好きです。



ブナ科ゾーンの著者と大澤泉さん

日本三大祭のひとつ、「祇園祭」のクライマックス、7月17日の巡行を終えた翌日の休日を利用して無二の親友と二人、ふらっと京大植物園の門を潜った。一瞬にして都会の騒音は消え失せ、溪谷の清涼な岩清水で喉を潤したように体感温度も一気に降下した。親友、大澤泉君は「植物」の写真を撮っている。

私の目当ては「きのこ」。春の散策では冬虫夏草の一種オオゼミタケを確認している。今回の訪問で最初に目に付いたのは切り株や大木の立ち枯れの幹に発生した姿かたちの良いコフキササルノコシカケだった。隣接して成長していたヤブミョウガの緑の葉の上に、大きく成長したコフキササルノコシカケが放出したチョコレート色の胞子が覆いかぶさり、周辺の植物を茶色に染めている。大量の胞子が放出された自然の営みそのままの様子が観察出来る環境であることが大変貴重だ。



コフキササルノコシカケ

撮影する為に三脚を立て重い一眼レフのカメラを装着しファインダーを覗いた。気合いを込めて良く観ると・・・なんと！胞子が放出されている瞬間が確認出来た。数秒毎に煙より薄いもやもやが僅かな空気の流れに

よって漂っては消え、またふわぁ〜と現れるのだ。「きのこ」も確かに生きている。自分と同じように命ある生き物だ！と実感し感動したひと時だった。その他にも園内の植生や状況の変化に伴って、多種多様のきのこが観察出来た。イタチタケの群生や、立ち枯れの枝にはアラゲキクラゲが雨の水分を待って硬く身を縮めて成長のチャンスを窺っていた。苔地にはヒメコナカブリツルタケや、毒きのこの一種アセタケの仲間が可愛い姿を現していた。また、夏の到来を告げるかのように数種の小型のイグチ類も顔を出し始めていた。楓(フウ)の落下した古い実からも黒色の細くて硬い紐状のきのこが発生していた。自然豊かな京大植物園は、植物と動物、そして菌類の四季を通じての包み隠しの無い自然の営みが観察出来る貴重な森だと思っている。

私は幼少の頃から北野の森(北野天満宮・通称天神さん)や、御所の森(京都御苑・通称御所)を遊び場として自然の中で多くの時間を過ごして来ました。四季折々の美しい自然を自らの「五感」で感じながら、ある時は朝日が昇る早朝の美しさを知り、またある時は暗闇に光る菌糸の発光性を調べに通った。春は柔らかな若葉の匂いを感じ、夏は白い雲の下で汗を流し、秋は錦織の天然の芸術作品を眺め、冬は落ち葉を踏みしめて薄っすら雪化粧の林を歩いた。私は冗談で『我が家の庭♪』と公然と言い放って笑っている。

「知的資産」商品化あれやこれ

今山稲子

京都大学理学研究科生物系図書室

大学ブランドを冠した製品が注目されている。特に最近では大学の研究成果や所有する資料など、いわゆる「知的資産」と呼ばれるものの商品化がめざましい。大学の中には当局そのものが商品化の部局を作り、盛んに大学のブランドとイメージ強化を図っているところもある。京都大学の場合、知的資産の商品化と販売は大学生協が行っている。「行っている」と敢えて書いたのはけして大学当局から依頼されて請け負っているわけではないからだ。どちらかというと「作らせてください」と「お願い」して事業を展開し、なおかつその売上の何%かを大学に寄付するという形。大学的にはリスクなしの非常においしい商売だ。

国立大学が独立行政法人となって数年が経つが、毎年国からの校費は削減されている。そんな中で大学の図書室で働いている我々もまたこれからの大学の図書室の存在理由をあれこれと考えながら仕事せざるを得ない状況にある。一般的に図書室、図書館というものは利用者の求める資料を提供し、保存するところと認識されていると思う。それに間違いはない。だが、保存あるいは所蔵していくということは「タダ」ではできないのである。新しく買った資料も利用される毎に、年を経る毎に痛んでいくし、カビも生

える。痛んだ本は修理をしなければいけないし、カビを繁殖させない環境を整えなければならない。雑誌は製本しなければ散逸してしまう。保存にはそれなりの維持費が必要なのである。校費が減らされていく以上、図書費の先細りも否めない。もっと積極的に何かできることはないかと思っていた矢先に大学生協から大学グッズの作成委員会へのお誘いがかかった。幸いにも法人化になる数年前に生物科学図書室では既にシーボルトの『日本植物誌』ほか数点のデジタル化を済ませていて、この画像を利用して何か商品化できないか、利益の一部を図書経費に還元できないかと話していた頃の出来事だった。

特に利用請求の多い『日本植物誌』『日本動物誌』の画像は、学術的なばかりではなく芸術的な魅力も備えているので、まずは図書室からの提案としてはポストカードのセットとクリアファイル何種かのグッズ作成を提案した。内、クリアファイルについては販売単価に割高感があるのと、生協のこれ以上の在庫を抱えたくないとの理由で、現実に商品化までこぎつけたのは植物誌5種1セット、動物誌(鳥類)5種1セットのポストカードであった。当時の委員会の構成メンバーは生協職員(管理職含む)、教職員、学生委員で、特に学生委員については院生、学部学生とバランスのとれた構成で、大学グッズを作成するという点において意思の統合がうまくいっていたように思う。

出来上がったポストカードは実際よく売れた。この売上で図書室の経費にどれだけが

反映されるかといえば作った時点での画像使用料数万円だけである。製品としての売上は年度末にまとめて大学当局に支払われることになっているから大学には恩恵があっても学部にはまでは表立って下りてはこない。



写真：シーボルト絵葉書(植物編)

だが、その元となった資料がただそこに存在しているだけではなく、学術資料以外の面で大学に貢献し、図書室の経費のいくばくかを補ってくれているわけだ。これは是非シリーズ化して継続的な収入の道を考えなければならなかった。それに植物誌はともかく、動物誌については元来が鳥類、魚類、甲殻類、哺乳類、爬虫類(両生類含む)の5部構成の資料なので、鳥類のポストカードだけでは完璧でないとの思いも強くあった。

次年度の委員会には魚類の図版を京大博物館の中坊先生(京都大学総合博物館・魚類系統分類学)に選んでもらい、また特に評判のよかった植物誌からアジサイの図版をいくつか選び、アジサイだけのポストカードセットの提案を持ち込んだ。委員会の構成は昨年度とはがらりと変わり、学生委員は学部学生しかも一回生委員だけで委員会の過半数

を超えるという異常事態になっていた。なんでも生協が新入生組合員を対象にした合宿ゼミを行い、大学グッズ作成の盛り上がりの流れで集まってしまったのだそう。生協職員としては、ちょっとこの人数は多すぎるとは思いつつも新入生組合員のやる気と意志を尊重したいとのこと。こんな感じで始まった会議は新入生の提案する『総長トランプ』のプレゼンから始まった。当時の総長をモチーフにしたトランプだそうで合宿中にもこの話題でたいそう盛り上がったそうだ。だが「今の総長、秋には変わるよ。次の総長、決まっているし」という私の一言にいきなり新入生たちのテンションは下がった。どうも彼らは総長が任期制だということを知らなかったらしい。テンションのぐっと落ちたところでシーボルトポストカード続編の話題になったのだが、新入生委員から「理学部のポストカードだけでは京都大学をアピールしたことにはならない。二回目以降は他の学部の資産のポストカードを考えていくべき。試しに全学からポストカードにしたい図版を提出させコンペをしてみたら」との意見が出た。これには生協職員も真っ青。大学の所有する学術的資産というものは、どこの学部の資産がどの学部の資産より優れて価値があるとかないとか比較できるものではないし、論じられるべきものでもない。新入生だから仕方ないのか、とも思うが大学生なのだからこれから一つ一つ社会の価値観の多様性も学んでいってもらいたいという気持ちもある。が、これ以上の議論はする必要もなさそ

うだったので、とりあえず『日本動物誌』は鳥類だけでは生物科学図書室をアピールしたことにはならない」と言い残して中座した。



写真：シーボルト絵葉書（動物編）

その後、委員会には参加していないが、大学生協からは『日本動物誌』魚類の画像5枚の特別利用申請が出て、画像使用料も振り込まれてきた。まあ、近いうちには魚類編ポストカードが商品化されるだろう。

たかがポストカードを作るだけで外からは見えない壁や手間がある。生物科学図書室の図書委員会(動物学、植物学、生物物理学の3教室の教員で構成される)にかけたり、専攻科長(生物科学専攻科=動物、植物、生物物理学の3教室のトップ)の許可、研究科長(理学研究科のトップ)の許可を得る。課金をし、いくばくかの使用料を得るために経理の事務方とやりとりしなければならない。こうした手間隙も資産の濫用を防ぎ、保守するためには必要な防護柵なのかもしれない。京都大学のように帝国大学時代からの国立大学としての歴史や伝統のある大学では、独立行政法人となったからといって組織の体制や

個々人の意識改革まで法人化されるには時間を要することも否めない。だからといって今まで通りなんとかかのほほんとしのいでいくことを許してくれるほど世間は甘くない。今まで研究の場でのみ利用されていた資料=資産を大学内外の多くの人に見て、知って、使って楽しんで理解してもらうことは新たな研究支援の一つの方法であると思う。

植物園への意見を掲載してゆきます

京大植物園を考える会は、植物園の今を見つめなおし、今後のあり方について多様な立場から意見交換のできる場をつくることを目標に活動してきました。しかし、力至らず、園内樹木の伐採問題に端を発した「植物園問題」の発生から8年近くたった今日に至るまで、なかなか立場を越えた議論の場を実現できていません。『ゆくのき通信』でも、あえて植物園をめぐる現状の問題点や論点を正面から取り上げるのを避けてきたきらいがあります。これらへの反省から、時間や距離、そして世代差などの違いからなかなか直接出会うことは難しいけれども、植物園に思いを寄せる方々から、自由に意見を投稿していただける場を紙面の中に準備することにしました。第一回は、編集委員の一人である久松ユリさんによる寄稿依頼に応えてくださった、動物学教室名誉教授の村松繁さんのご寄稿を掲載いたします。村松さんは、50年前から植物園をご存じだとのこと。

植物園を考える

村松 繁

京都大学名誉教授(動物学教室・免疫生物学)

まず自己紹介をします。生まれは1932年(昭和7年)、51年京大理学部入学、60年理学部助手に採用、96年停年退官しました。植物園の思い出は、主に学生・院生時代のもので、50年代、すなわち約半世紀前のことということになります。

理学部では、教養課程を終えて、動物学科に分属しました。その年の同級生は、動物3人、植物3人で、3回生のときは、まとめて教育を受けました。最初の日、この6人と先輩諸氏および教官の顔合わせの後、教官の一人が教室内外をご案内下さり、私たちは学部らしい雰囲気を楽しみました。次いで、植物園へ皆を連れていってくださいました。そのときの感動は今でも忘れられません。なにしろ、学部、実質的には一教室が植物園を持ってるんですからね。それだけではありません。その造園の親しみやすい美しさと科学的に配置された植物達との出会いに感動したのです。初代の植物分類学教授、郡場寛先生以来、植物の諸先生の叡知と情緒と美的感覚を、未熟な学生の身ながら、身にしみて感じ取りました。

植物園では、植物分類学、動物生態学の野外実習がありました。指導して下さったのは、北村四郎先生(植物分類学)、村田源先生(同)、森主一先生(動物生態学)、それに弥次馬役

の小野喜三郎先生（動物生理学）など、錚々たる顔ぶれでした。ときには、実習そのもので、池の周りに車座になって先生方のうちくを拝聴したり、おたがいに雑談・議論したりと、人生においてかけがえのない時間をすごしました。



広々とした景観のかつての植物園。（『京都大学百年史』京都大学後援会，1997年）

実習以外に忘れてならないのは、植物園が一般の人にも憩いの場であったということです。休みの日には、アベック（これ死語？今ならペア？）もちらほらでした。男性は京大生、ガールフレンドはいろいろという組み合わせが多かったようです。この植物園を披露することによって、男性の値打ちが高まりました。

5年前に植物園を考える会に私が一文を寄せたのにつづいて、今度は「ゆくのき通信」に何か書けと頼まれました。植物や園芸には至って疎い私ですが、たとえ忸怩たる気持ちであっても、引き受けた限りは現場を見てこなくてはいけません。先日、何十年ぶりかで夏の暑い日に一人で、植物園を一回りしてきました。齒に衣着せずには申しますと、私の学生・院生頃の心をなごませた植物園とは

うって変わり、道にも迷いそうになり、二つあった池も、南のは消失し、北の大きいほうのは、小さい水たまりになってしまっていて、すべて惨憺という言葉がぴったりするなあ、と痛感しました。

「ゆくのき通信」には、観察会や句会をはじめとして、情緒あふるる記事がたくさん載っていますが、これらの方々の神経の細やかさ、植物とくに歴史的に意味のある植物への愛情と造詣の深さには、感嘆と敬服あるのみです。植物園では園丁さん（これも古い言葉ですな）にお会いしました。当然ながら、この方は私よりかなり若くて、私が昔のことや、それらがどのように雲消霧散したのかをお訊きしてもご存じなく、あべこべに私がいろいろと昔話をしたという状態でした。

植物園を、かくも荒廃させたのは誰か。専門家のうちには、荒廃などしていない、大切なものはちゃんと保存されているし、新しい育種も行われていると仰るかたがおられるかもしれません。いや、きっとおられるでしょう。しかし、それでは植物園ではなく、植物保存場であり実験圃場です。関係者一同で、それでよいのだと意見が一致し、今は専門研究者と、上述の愛情と造詣のとくに深い方々のみか、荒れた山道のようなところに情緒を見いだせばいいんだとお考えでしたら、私など何も口をはさむ余地はありません。しかし、それなら植物園の看板は下ろすべきでしょう。大学の植物園には、勉強と研究は必須ですが、憩いとくつろぎ、今はやりのことばでいえば、癒しもなくてはなりません。

京大という大学は、なにやら自己満足的なプライドを謳ってますが、決定的欠陥は、学問研究以外の重要なことに関する無関心さです。北部構内でも、折角あのように立派なグラウンド地がありながら、実状は単なる空き地といったほうがぴったりです。国際規格の陸上競技場に整備することが、京大のスポーツレベルの向上に不可欠でしょう。南の方の交響楽団の練習場にしたって、なんたることでしょうか。体育会や学団の諸君の努力には敬服します。ただし、近い将来に改善の計画があるのかもしれませんが。それなら結構ですが、少なくとも、一世紀にわたって惨めであったことは事実です。

同じことが、この半世紀の植物園にもいえます。上に、植物園を荒廃させたのは誰かと申しましたが、物理的には、侵食してきた建物群、すなわち、数理解析研究所、基礎物理学研究所、そして、こともあろうに、ど真ん中につくられた植物生態研究施設(60何年かの創立当時の名称)などですが、もっと重大な原因は、植物学に関係する人の「心」でしょう。もし、今の植物園と称するものを本当の植物園に復活あるいはそれ以上のものに創造(あえて創造といいます)するには、それなりの人知と手間と費用が必要であることはいまでもありません。それには、植物学教室や理学部だけでは荷が重すぎるかもしれません。関係諸機関(たとえば農学部や総合博物館など)の協力も必要でしょう。

問題提起をしたところで、紙数も超過しましたので駄文を終わります。

植物にちなんだ日本の色の和名

有元高太

染色家

桃・梅・桜・小豆・萱草・枇杷・山吹・桑・玉蜀黍・煤竹・海松・菜の花・柳・松葉・木賊・藤・桔梗・菖蒲・杜若・葡萄・牡丹など。これら植物の名前は、実は全て色の名前なのです。これらはその植物の花や実、葉の色などにちなんでつけられたもので、これらの植物で染められたというわけではありません。これら草花にちなんだ色の名前の由来や時代について少しお話してみようかと思えます。

桃にちなんで

桃染・桃花褐(つきそめ)

この言い方はかなり古く飛鳥時代からある名前で、桃の花の色になぞられてつけられました。読み方が「つきそめ」と少し特殊な読みになるのですが、この「つき」というのは実は朱鷺の古名のことなのだそうです。桃の花の色は一見すると朱鷺が大空を舞うときに見える羽の色に似ていると感じたのでしょう。日本人は古来よりこの「とき」という鳥をこよなく愛したようです。その愛して止まぬ朱鷺と、大陸よりはいつてきた思想で桃の霊験を重ね合わせたのかもしれませんが。この色を染めるには、当時はとても高価だったと思われる紅花を使って染めたようです。



ベニバナ

なぜ紅花が高価だったかという、当時これは輸入染料の一つだったからなのです。紅花はもともと中東が原産の植物で、それが中国を經由し朝鮮との交易の中で日本へと渡ってきたようです。紅花の紅（くれない）という読みがそれを示しています。くれないは漢字で書くと呉藍と書きました。このときの藍は現在の藍染めの藍ということではなく染料という意味で使われており、「くれあい」は呉（朝鮮半島）より伝わった染料という意味になります。この「くれあい」がのちに転訛して「くれない」となり、文字も糸を加工してつける色ということから「紅」となったようです。ここからもわかるように「桃染」は貴人のための色だったようです。

では、現在使われる「桃色（ももいろ）」はというと江戸時代になってからの色なのです。江戸時代になったからといっても紅花は高価でした。そこで紅花のような高価な染料の代わりになるものはないかと探し出したのが蘇芳（すおう）でした。蘇芳は紅花ほど彩度と明度が高い赤ではないのですが、江戸の庶民には手軽に染められる赤の染料と

して好まれたようです。そして、この蘇芳を使い染めたのが「桃色」でした。つまり桃染と桃色はまったく別の色なのです。桃染は絹、桃色は木綿と生地も違ったようですね。ここからもわかるように高価な絹の桃色は桃染、木綿は桃色木綿と呼び区別していたようです。

桃にちなんだ色の名前の最後は「桃紅色（とうこうしょく）」こちらはかなり新しく大正以後の色の名前として出てきました。明治維新以降日本にはいろいろな色が輸入されるようになって来ました。化学染料の流入です。化学染料が入ってくると色もその数をぐっと増やしていきました。そんな中で染色などでは文学の世界と呼応して芸術復古として、いろいろと模索が始まった時期でもありました。そんな中で生まれたのがこの桃紅色でした。当時の染料としてはコチニールと呼ばれる南米原産のサポテンにつくカイガラムシを染料として染められたと思われま。現代になってもこの桃紅色はコチニールを用いて染めています。また面白いのは前述の二つの色は桃の花の色といわれているのに対して、桃紅色は桃の実の色なのだそうです。ほんの少しの違いをいろいろと模索しながら作り出したのでしょね。日本人の持つ自然観察の目は色のほんの少しの違いを見抜き、染料を使い染め出して表現していくというとてもすばらしい目を持っていたようです。

葡萄にちなんで

深葡萄（ふかきえびぞめ）・葡萄（えびぞ

め)・浅葡萄(あさきえびぞめ)。この3つの色は飛鳥から奈良時代にかけての色の名前前で、葡萄と書きながら読みは「えびぞめ」と読みます。この読みは葡萄蔓の古名が「えびづる」だったので葡萄蔓や山葡萄の実で染めた青みのある紫色だったことからこの読みがつけました。奈良時代のいつ頃からか、葡萄蔓では退色が激しいため紫草(むらさき)が使われ始めました。後の平安中期になると葡萄染(えびぞめ)と呼ばれる赤みのある紫が主流となります。色のはやりすたりはすでにこのころにはあったみたいですね。



ムラサキ

では、葡萄をぶどうと読む色の名前はないのかというと、明治になり文明開化とともに西洋文化が入ってくると現れます。

葡萄色(ぶどういろ)・葡萄紫(ぶどうむらさき)という色がそれになります。色としては赤紫で、葡萄の果皮の色を模したものだといわれています。明治期になぜぶどうと呼ぶようになったかという、この頃に海老茶(えびちゃ)と呼ばれる伊勢海老の色が流行するんです。色としても赤紫とよく似ているのだが、葡萄色は純粋に赤紫、海老茶は茶味がかかった赤紫と少し違っている。色も似てい

るのだが、音も一緒では混同するということで、葡萄色をぶどういろとよび海老茶はもともと海老の色(生まれたての伊勢海老の色)を模したのでそのまま海老茶(えびちゃ)と呼ぶようになったのだそうです。この海老茶は大正時代の女学生の袴の色として大流行した色の一つでもある。

少し話がずれるのですが、葡萄(えびぞめ)の染めに使われていた紫草(むらさき)という植物なのですが、今は野生種のものほとんどないそうです。この植物の名前の「むらさき」という呼び名はその染め色が由来でつきました。その語源は遠く朝鮮半島にあるといわれています。紫は朝鮮語(韓国語)では「ポラセック」というのだそうです。このポラセックという言葉が色とともに大陸よりもたらされました。

当時の日本ではまだそれほど染色技術もない頃だったので、青でも赤でもない不思議な色としてとても珍重がられたようです。このポラセックという言葉が転訛して紫になったといわれています。私はこの話を知ったときにちょっと不思議に思いました。転訛したには無理があるのではと思い、韓国の友人にむらさきを韓国語ではどういのかを聞いてみたところ、日本語表記ではたしかに「ポラセック」としか書きようがないのだが実際に音として聞いたところかなり近い音に聞こえることを知りました。紫はこの言葉とともに染色技術が朝鮮からやってきて、その色に染めるための植物である紫草(むらさき)にその名をつけたのだそうです。

まずは色ありきの名前といえそうです。

萱草にちなんで

萱草色（かんぞういろ）、これは萱草の花の色ともいわれる色で平安期に現れる色の名前です。これは平安の王朝ではとても愛された色なのでしょうね。その証拠にとっても多くの別名を持っています。つわぶき色、花つわぶき色などの名前が平安期についています。これが江戸時代になると濃柑子（こいこうじ）といい、ちょうど今の季節の濃いめのみかんの皮の色と呼ばれるようになりました。

これより少し薄い色を柑子色（こうじいろ 鎌倉）・中柑子（なかこうじ 江戸）蜜柑色（みかんいろ 現代）と呼びました。この色に少し赤味を足すと紅柑子（べにこうじ 江戸）という色になります。この紅柑子は別名を朱桜（かばざくら 江戸）ともいいます。蜜柑も種類が多くありますが、その種類に応じて染め色が出来ていたのかもしれませんが。この色が江戸時代にもはやされた頃が、ちょうど元禄の頃で世間が華やかな頃。今風に言えば江戸バブルの頃とでもいいでしょうか、そのバブルの頃の江戸時代は染色の世界の過渡期でもありました。もともと染めは王朝文化とともに育ったので京の都のものと思われていたはずなのに、江戸に主権が移ると徐々に工芸の主体も江戸へと移り始めたのです。衣装でも東の小紋、西の友禅といった感じで色も江戸と都でどんどんと作られていきました。特に紫は多くこの時代に作られました。正当な紫草を主体に紅花などを重

ねた紅掛という色、江戸紫などが代表する藍と蘇芳や紅花を重ねた紫などなど。また、前述の紅柑子（べにこうじ）と朱桜（かばざくら）もその一つで、紅柑子は西の言い方、朱桜は東の言い方だったようです。

海松（みる）にちなんで

海松（みる）という植物はご存知でしょうか？ これは海草の一種で食用にも適している海草です。茹でてからいただくのですが、茹でるととてもきれいな緑に変化します。

そんな海松にちなんだ色は「海松色（みるいろ 平安）」と呼ばれ、海に生えているときの色を模した少しくすみのある緑色です。少し茶味がかかった色でもあるところから「海松茶（みるちゃ 平安）」とも呼ばれました。一説によると「黒萌木（くろもえぎ 平安）」と同じ色目だったのでは？ という説があります。後に江戸時代には「素海松茶（すみるちゃ）とも呼ばれるようになります。これは、「染色にすみる茶といえるものあり、松羅国（すみるこく）の産の絹の色、皆此色に染めて舶来せし故なり」（嗚呼矣草より）とかかかれているところから、どうも舶来の高価な絹布の色だったようです。江戸時代にはバブルがはじけ贅沢禁止令がしかれるというときがありました。このときに「四十八茶百鼠」と呼ばれる色が誕生してきます。この海松色はもともと茶として扱われていたので、これを元に黄海松茶（きみるちゃ）や藍海松茶（あいみるちゃ）などという色も誕生してきました。贅沢禁止令に対しての町衆の反骨の色の一つだったようです。

編集後記

今号も、植物園と関わりの深い方々による力作ぞろい、盛り沢山の内容になりました。京大植物園という小さな窓には、世代や専門分野、なりわいを越えて様々な世界をのぞく楽しみがあります。そこに、植物という存在の人間とのかかわりの深さと86年という時間の重みを感じます。生き物との関わりを介して人と人をつないでくれる植物園には、本来、争いや怒号は似合わないのでしょう。40万点以上という数の日本の植物のさく葉標本を残し、有名な牧野植物図鑑を著した故・牧野富太郎博士は、著書『植物知識』（講談社、1981）で植物世界にひたる喜びを以下のように述べています。

自然の宗教！その本尊は植物。なんら儒教、仏教と異なるところはない。今日私は飽くまでもこの自然宗教にひたりながら日々を愉快地過ごしていて、なんら不平の気持ちはなく、心はいつも平平坦坦である。(p. 101)

次号では、特別座談会の内容を特集として掲載予定です。どうぞお楽しみに。

2009年11月7日 大石高典

京大植物園を考える会ニュースレター

ゆくのき通信 第6号

発行：2009年11月21日 京大植物園を考える会

印刷：株式会社北斗プリント社

事務局：〒606-8799 左京郵便局 私書箱5号「京大植物園を考える会」

URL: <http://members.at.infoseek.co.jp/bgarden/>

E-mail: kyotoubg@gmail.com